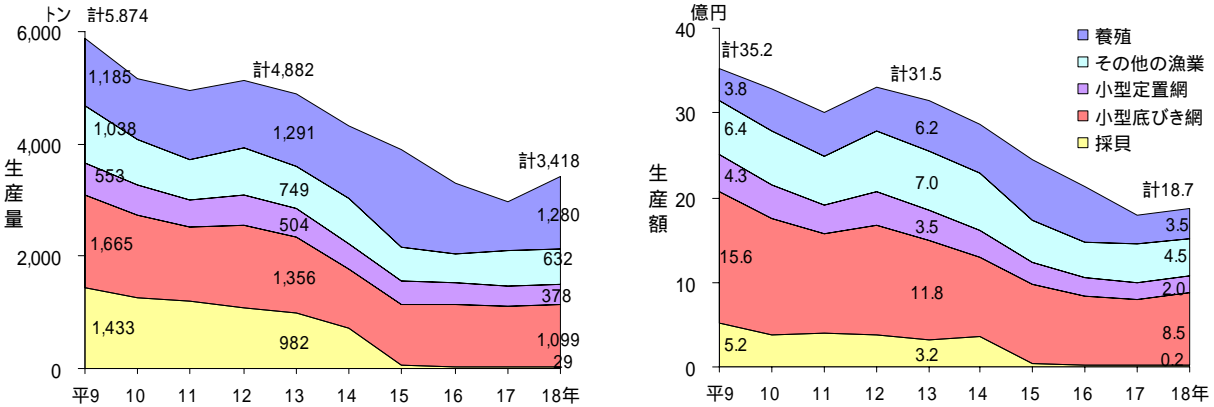


各海区の動向

3 豊前海区

(1) 漁業生産

18年の総生産量は、カキの収穫量が回復したため、3,418トンとなり、前年と比べ約460トン増加しました。生産額は18億7,400万円となり、前年と比べ約8,300万円増加しました。



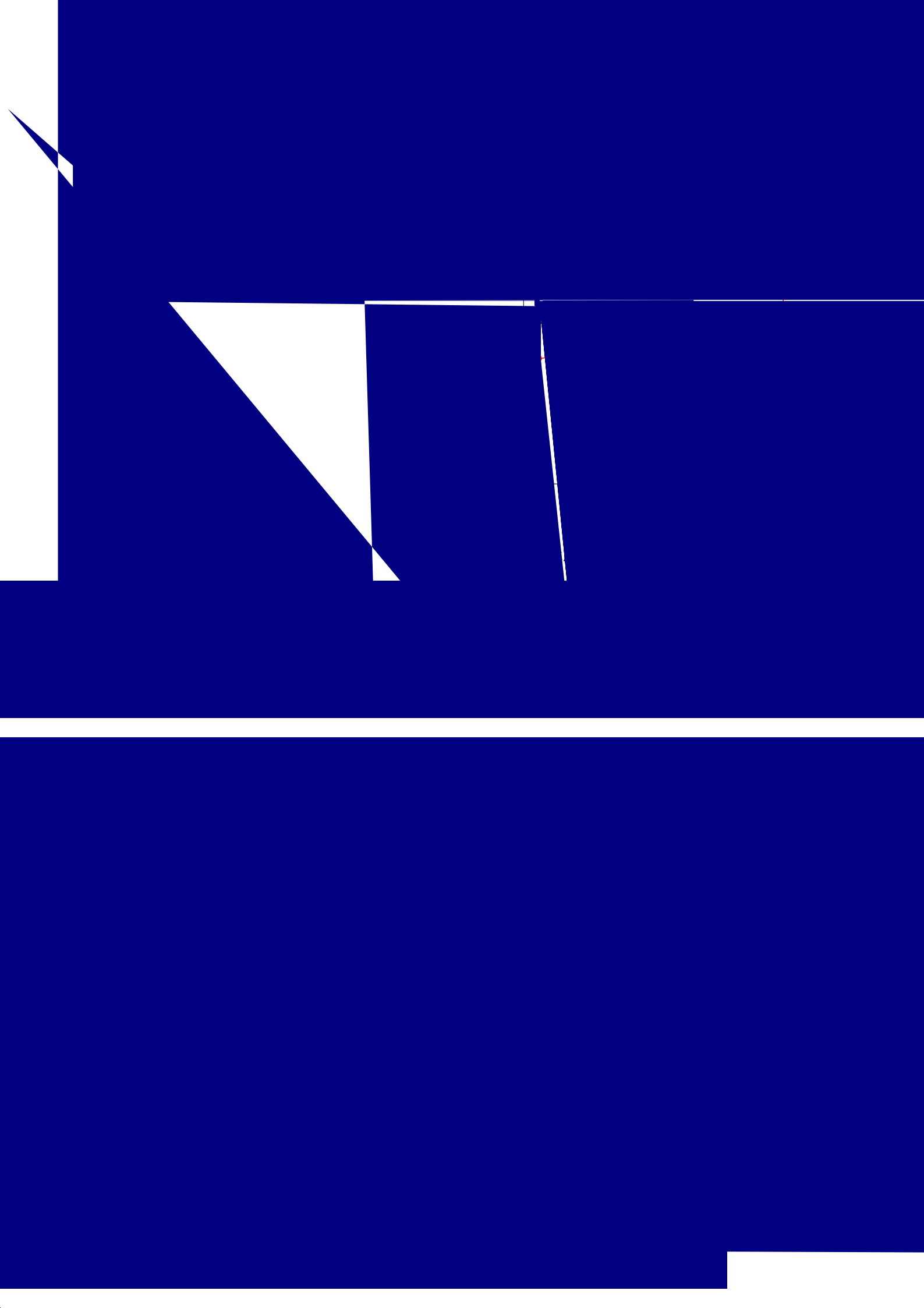
漁業種類別生産量、生産額の推移
(福岡農林水産統計年報)

漁船漁業

- ・18年の生産量は2,138トンで前年並、生産額は15億2,200万円の前年に比べ5%増加しました。
- ・小型底びき網の漁獲量は1,099トンで前年並、生産額は8億5,200万円の前年に比べ8%増加しました。
- ・小型定置網の漁獲量は378トンで前年並、生産額は2億200万円の前年に比べ7%増加しました。
- ・採貝の漁獲量は29トンで前年並、生産額は1,800万円の前年に比べ13%増加しました。

魚種別漁獲量

- ・カレイ類は、82トンで前年に比べ7%減少しました。
- ・ボラ類は、94トンで前年並でした。
- ・スズキ類は、96トンで前年並でした。
- ・コウイカ類は、158トンで前年に比べ32%増加、16年以降増加傾向にあります。
- ・ガザミ類は、206トンで前年に比べ18%増加しました。
- ・クルマエビは、33トンで前年並でした。
- ・シャコは、281トンと前年並でした。
- ・アサリは、27トンで前年に比べ18%増加しましたが、資源は低水準で推移しています。



(2) 豊前海におけるアカモクの利用加工

アカモクとは

アカモクはワカメと同じ褐藻類の仲間の海藻で、日本に広く分布し、本県では豊前海と筑前海で自生が確認されています。アカモクは、冬から春にかけて急生長し、最大7m以上になる大型の海藻で、体に良い成分とされているフコイタンを多く含み(福岡産アカモクは100g当たり約500~700mg含有(県水産海洋技術センター調べ))、さらに、ビタミンやミネラルも豊富に含んでいます。



アカモク

福岡県では、このアカモクを食用としてほとんど利用してきませんでした。県の指導のもと、16年に筑前海区において県内で初めて販売が開始されました。最近、豊前海区でもその有効利用について着目され、漁業者による加工販売の取組が始まっています。

漁協の販売活動

豊築漁協の宇島青壮年部は、県の加工指導を受け、19年度に豊前市の道の駅「おこしかけ」で、アカモクの試験販売を行いました。新聞で紹介されたことも追い風となり評判は上々で、この結果を受けて20年4月から本格的な出荷が始まっています。

また、豊前海北部漁協恒見支所では、県の支援のもと、19年度にアカモク加工施設を整備するなど豊前海区全体でアカモクの利用加工の気運が高まっています。



「おこしかけ」での試食キャンペーン

アカモクの利用について

アカモクの食べ方としては、ポン酢やしょう油をかけて、そのまま食するほか、うどんやみそ汁の具としても利用できます。さらに、アカモクは健康食品としての利用についても着目されています。

県では、このアカモクを、今後の利用加工の可能性に期待が持てる豊前海の新しい特産品として育成していきます。



アカモクの食べ方の一例

(3) ナルトビエイ対策

豊前海区のアサリ漁獲量は減少傾向にあり、近年100トンを下回って推移しています。その原因として様々なことが考えられていますが、最近ではナルトビエイによる食害の影響も問題となっています。ナルトビエイは初夏から晩秋にかけて豊前海に來遊し、アサリ等の二枚貝を好んで捕食します。

このため、漁業者はナルトビエイからアサリ等を守るため防除・駆除対策に取り組んでいます。

防除対策

行橋市沓尾地先のアサリ漁場では、網で干潟を囲ったナルトビエイ防護施設を県の支援により設置しました。

また、吉富干潟では漁業者と共同し、笹付竹による簡易な防護区を設置しました。ナルトビエイが最も來遊する夏季には非防護区の周辺では約800個/haの食害痕がみられましたが、防護区にはほとんどみられず、笹付竹による効果が確認されました。

駆除対策

19年度から、当海区で初のナルトビエイの駆除事業が実施され、7月上旬から下旬にかけて70トン以上のナルトビエイを捕獲しました。これらはミール工場で魚粉等に処理された後、飼料等として利用されています。

今後の展開

従来の駆除事業に加え、県では効率的な駆除のための出現状況調査を実施するとともに漁業者が実施する捕獲調査を支援します。

また、捕獲したナルトビエイの有効活用のため、加工業者と連携を図りながらかまぼこ材料としての利用について検討を進めています。

今後も県ではアサリ等の資源をナルトビエイから守るための対策に取り組めます。



ナルトビエイ



笹付竹による防除試験



捕獲されたナルトビエイの測定

各海区の動向

(4) 豊前海の試験研究情報 = 投棄魚の有効利用(小型底びき網漁業) =

背景・目的

豊前海区の主要な漁業種に小型底びき網漁業があります。この漁業では、クルマエビやガザミなどの主な漁獲物以外に様々な種類の魚介類が混獲されます。これらの混獲物の中には通常出荷の対象とならない魚種であったり、漁獲の対象であっても出荷サイズに達していない小型魚が含まれています。

このうち資源管理のため小型魚を保護する取組は、豊前海研究所が漁業者と共同で開発した海水シャワー装置が漁業者の間に定着しています。そこで、今回は、通常は出荷の対象とされていない魚種の有効利用の可能性について検討を行いました。

成果の概要

通常は出荷されていない魚種のうち比較的量が多いものとして、小型カニ類(フタホシイシガニなど)、小型のジンドウイカ、ツバクロエイなどがあります。そこでこれら3品目について加工試験を行い、味や加工のしやすさなど、総合的な評価を行いました。その結果、ツバクロエイのみりん干しが高い評価となりました。

この試験結果を受け、豊前海区の小型底びき網漁業者で構成される「豊前海区小型底曳網漁業者協議会」では、ツバクロエイのみりん干しの商品化に取り組むことになりました。20年1月には、同協議会の委員による試作が行われるなど、20年度からの本格的な取組に向けて準備が進められています。

豊前海の新たな名産品を目指したこの取組を、県も支援していきます。

試作品の評価の結果

魚種 / 試作品		味 ₁	加工作業 ₂	船上での選別 ₂	商品の取扱 ₂	販売単価 ₃	総合評価
小型カニ類	素揚げ						
	カニ汁						
小型ジンドウイカ	沖漬け						
ツバクロエイ	みりん干し						

1 :とても良い :良い
 2 :容易 :やや容易 :やや困難
 3 :高い :普通 :安い



漁業者による試作の様子



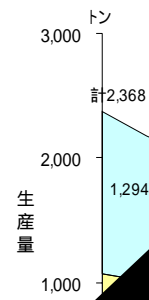
試作品(ツバクロエイのみりん干し)

4 内水面

(1) 漁業生産

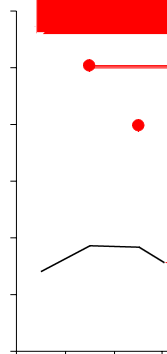
内水面の漁業は、筑後川、矢部川をはじめ多くの河川や湖沼で、アユ、オイカワ、コイ、フナ、ウナギ、エツ等の魚類がさし網、投網、釣り、うけ、かご等で、シジミがじょれんにより漁獲されています。

養殖業は、コイ、ヤマメ、アユやウナギ等の養殖が営まれています。また、全国で唯一のスイゼンジノリの養殖も行われてい



養殖業

- ・内水面養殖業の生産量は、262トン（4億2,200万円）で前年に比べ39トン減少しました。
- ・コイは、101トンで、コイヘルペスウイルス（KHV）病の影響により前年に比べ28%減少しました。
- ・ウナギは、67トンで、まとまった量の種苗が確保できたため前年に比べ16%増加しました。
- ・スイゼンジノリは、74トンで前年に比べ6%減少しました。



魚種別
（福岡農林水産局）

（2）内水面漁業の概要

本県では、筑後川、八木山川、今川、^{はらい} 祓川、岩岳川、佐井川、花宗池に共同漁業権が免許されています。県は内水面の漁協及び内水面漁連と協力して、内水面漁場の水産資源の持続的な増殖と管理を行うとともに、消費拡大に努めています。

水産資源の現状

内水面関係の水産資源は、アユ約100万尾、ウナギ約10万尾、モクズガニ約8万尾など9魚種が確認されています。さらに、内水面漁協はオイカワ等の産卵床の造成も実施し、水産資源の増殖を図っています。

また、筑後川産種であるエツについては、下筑後川に産卵施設において種苗生産された稚魚が放流されています。



アユの放流（京二川漁協）

外来魚対策

県内の内水面では、ブラックバス及びブルーギル等の外来魚が多く生息し、内水面漁業への影響が懸念されています。

各海区の動向

筑後川、矢部川、今川など主要な漁場では、漁獲対象種を守るため、漁業者によるブラックバス、ブルーギルの駆除活動が実施されています。また、漁協が主体となり、外来魚の駆除を目的とした釣り大会を寺内ダム、犬山ダム、力丸ダム、筑後川下流域等で行っています。加えて、県では外来魚の密放流防止のための啓発活動を行うとともに、内水面漁場管理委員会によりモデル水域に指定された筑後川、矢部川、今川及び祓川の各水系でカゴを使うなど漁業者が行う外来魚の効果的な駆除法の実証事業を支援しています。



外来魚駆除のための釣り大会(下筑後川漁協)

淡水魚介類の消費拡大

県は淡水魚介類の消費拡大のため、内水面漁連と連携し、地域のイベントや県農林水産まつりにおいて、試食会やパンフレット配布などの宣伝活動を行っています。

19年10月に久留米市で開かれた筑後スローフードフェスタでは、アユの塩焼きやハヤの甘露煮等を販売しました。また19年11月に開かれた「福岡県農林水産まつり」においてモクズガニなどの販売が行われ、特にハヤの甘露煮は首都圏でもPRが行われるなど、淡水魚介類の宣伝、普及が図られています。



筑後スローフードフェスタ
(矢部川ブースに来訪した知事)

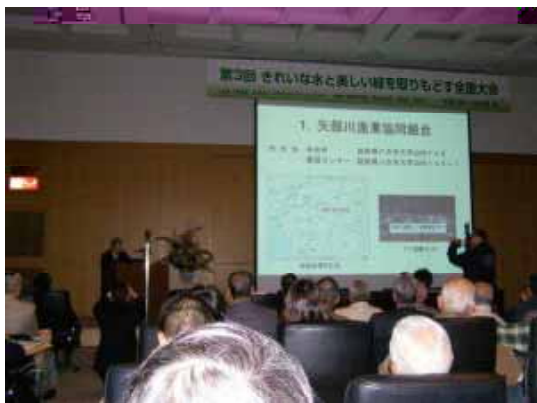
内水面環境の保全

内水面の水産資源を維持、増大させるためには内水面環境の保全が必要です。そのためには、漁業者はもとより、遊漁者や一般の県民の協力が不可欠です。県は、内水面漁連と連携し、河川環境及び生態系の保全について、啓発事業や環境調査等を実施しています。

また、漁協及び内水面漁連においては河川清掃や研修が行われるなど、漁業者自ら環境の保全に取り組んでいます。

各海区の動向

19年度は矢部川漁協が「きれいな水と美しい緑を取りもどす全国大会」において、河川清掃等長年の河川環境保全に関する取組について報告し、優秀賞を受賞しました。



平成19年度きれいな水と美しい緑を取りもどす全国大会
(矢部川漁協による報告と受賞の様子)

(3) コイヘルペスウイルス病対策

コイヘルペスウイルス病は、コイヘルペスウイルス（KHV）の感染によって発病するコイ特有の病気であり、コイの死亡率が高く、治療法も確立されていないことから、防疫やまん延防止措置を厳格に行う必要があります。

なお、この病気はコイ以外の魚には感染せず、また、人が食べても全く問題はありません。

発生状況

本県で15年11月に初めて発生が確認されて以降、16年度には河川やクリークの天然ゴイや養殖ゴイで多発し、大きな被害が発生したものの、17年度以降は発生件数が大幅に減少しています。

県内での発生状況（陽性確認件数）

年度	15	16	17	18	19	計
天然水域	0	41	13	1	0	55
養殖場	2	4	1	1	0	8
その他(個人池等)	0	1	2	0	1	4
計	2	46	16	2	1	67

対策

県では対策チームを設置しており、検査体制の整備、関係機関との連携による監視強化、県内全域を対象とするコイの放流規制、情報の発信、最新知見の収集、風評被害対策などを行ってきました。今後もこれらの取組を継続し、まん延防止、被害拡大防止に努めます。

各海区の動向

(4) 内水面の試験研究情報 = 小石原川・佐田川の魚類や漁場環境を調査 =

背景、目的

小石原川・佐田川は、ともに朝倉地域を流れる筑後川の支流です。地域の漁業を支える漁場として重要なだけでなく、地域住民に親水の間を提供しています。特に小石原川は景観地区「秋月」を流れ、流域住民のみならず福岡都市圏の住民にもなじみの深い河川となっています。



小石原川

内水面研究所では、この両河川を含む漁業権設定河川について、毎年1～2河川の河川環境や水産生物の生息状況等を把握し、漁業者に対し水産資源の増殖手法等に関する提言を行っています。

今回、10年ぶりに小石原川、佐田川について調査を行い、その間の河川環境等の変化について比較検討しました。

成果の概要

調査の結果、小石原川に生息する魚の種類数は10年前とほぼ同じ15種類が確認され、特に今回、絶滅が危惧されているオヤニラミ、アカザやスナヤツメの生息も確認できました。

魚の餌となる水生昆虫などの底生生物の種類数もほぼ同程度に保たれており、筑後川などの大河川と同様に豊富であること、水質は今回の調査でも水産生物が成育するのに適した環境基準を満たしており、魚類などの水産生物の生育に適している状態を保っていることがわかりました。

これらの結果をもとに、小石原川・佐田川の水産資源の増殖・有効利用について総合的な提言を行うこととしています。

今後とも各種の調査を進め、流域住民の生活に密着した中・小河川における水産資源の有効利用について、親水域としての役割など多面的な機能を生かせる方策を検討していきます。

1：生物化学的酸素要求量、

2：化学的酸素要求量、

いずれも水のごれの指標となるものです。

調査結果の概要

項目	調査	前回	今回
魚類種類数		18	15
スナヤツメ		-	
アユ			
ウグイ			-
タカハヤ			
カワムツ			
オイカワ			
カマツカ			
イトモロコ		-	
ムギツク			
コイ			
ギンブナ			
アブラボテ			-
カネヒラ			-
タイリクシマドジョウ			-
ギバチ			-
アカザ		-	
マナマス			
カムルチー			-
オヤニラミ			
ドンコ			
ヨシノボリ類			
底生生物種類数		16	19
水質			
懸濁物量		環境基準値以下	環境基準値以下
BOD ¹ 、COD ²		環境基準値以下	環境基準値以下